結城川の謎

青柳　みすず

結城川は、田園都市である丸山市の北西から南東へと流れて、他市との境界となり、流域一帯を潤している風光明媚な川である。昔は暴れ川と呼ばれたらしいが、現在では拡幅工事・護岸工事が進んでおり、緑の河川敷も広大で、釣り人にとっては格好の穴場でもある。その故郷の川が一変して、小橋洋子にとって悲しみの川、疑惑の川になろうとは、想像もつかないことだった。洋子が会長をしているシルバー女性部の一員であった上田ぎんが、この川で不可解な死を遂げたのである。

六十名ほどからなるシルバー女性部の二か月に一度の集いは、市のやや北部にある健康福祉センター〝気楽館〟で行われる。メンバーの一人、上田ぎんは、七十九歳で一人暮らしであり、眼が不自由で、障害一級でもあった。たいへんな音楽好きで、〝カラオケ命〟の人だった。テレビ画面が見えないぎんは、歌詞をすべて暗誦して歌っていた。カラオケ歌唱検定なるものがあり、プロ並みの七段を取ったと洋子は聞いていた。困ったことに、ぎんは、他の人の音程が違っていると、訂正せずにはいられなかった。シルバー女性部の集いでも同様だった。訂正された方は、不愉快になる。洋子はぎんを物影に招いてそっと言った。

「ね、ぎんさん、私たち楽しみで歌っているのよ。でも、訂正されたら、興ざめになってしまうでしょう。ぎんさんは音程がしっかりしているけど、大抵の人は年を重ねたら、少しずつ狂ってくるのよ。私たちには、楽しく歌うことが大切なんだから、ぎんさんは気になるでしょうけど、そこはひとつ堪(こら)えて、他人(ひと)の歌を訂正しないでね」

「わかったよ。言わないよ」

一時が万事である。午後はカラオケの時間だが、午前中には島田先生から踊りを習うことになった。「きよしのズンドコ節」「百歳音頭」「八木節」などなど。しかし、八木節になると、上田ぎんは聞こえよがしに言う。

「そんなのは、本当の八木節じゃないよ」

眼の悪いぎんには、皆の踊りがどの程度見えているのか、洋子には見当もつかなかったが、ぎんは捨て台詞を吐きながら、カラオケテープの入ったウオークマンを持っ

て、部屋を出ていくのだった。肥満気味のぎんが、眼が不自由なため、ゆっくりと出ていく姿は目立った。島田先生に申し訳なく身の縮む思いだった洋子は、ぎんを廊下まで追いかけた。

「ぎんさん、席を立つ時、捨て台詞みたいな言い方しないでね。〝失礼します〟という気持ちでそっと部屋を出てね」

「だって、あんなの本当の八木節じゃないよ」

「島田先生は名取なの。私たちシルバーにも踊れるようにアレンジしてくださっているのじゃないかしら。だって、難しいと、私たちには踊れないでしょう。あんな態度で席を立つなんて先生に申し訳ないわ」

「それじゃ。黙って出るよ」

ぎんは自分を認めてもらいたいという気持ちを人一倍強く持っていた。認められていないと感じるからこそ、その気持ちが強いのだろう。障害を持っていながら、一人で生きていくことは、どんなに大変なことか。気丈にしていなければ生きていけない。また自分の境遇から生じるひがみ心が、何かにつけ他人への攻撃となって出た。〝それでは人から嫌われてしまう〟と洋子は心配した。事実、困った人だと思う人々も少なくなかった。しかし、ぎんは根は心優しい女性であることを洋子は感じ取っていた。

四月六日は、上田ぎんが楽しみにしていたカラオケ発表会の日だった。丸山市に新しい駅ができる以前には賑わっていた仲町通りに、小さな寿司屋若葉がある。若葉は板前の次男と、母親の女将との二人で経営しているが、〝若葉会カラオケ発表会〟の主催者は女将である。発表会前の数日間は、本番前の練習をする客が一日中入れ換わりして賑やかだった。

上田ぎんは、古い木造の市営住宅に住んでいたが、カラオケ発表会の前日である五日、集金に来たガス屋の女主人に、仲町の若葉にも支払いがあるから乗せて行って欲しいと頼んだ。ガス屋の女主人は、若葉までぎんを送ると、Uターンをしてすぐに帰って行った。ぎんは、眼が不自由なため動作が緩慢であることから、車が去る音がしてしばらく経って、若葉のガラス戸をガラガラと開けた。

「あら、ぎんさん！　どうしたの？」

女将は眼を丸くした。

「カラオケのお金払いに来たんだよ」
「まあ！　わざわざ来てくださらなくても結構よ、って言ってあったのに。明日会うのだから、その時でよかったのよ」
「ガス屋が集金に来たから乗せてもらって来たんだよ」
「そうなの。わざわざ有難うね。せっかくだから、練習していったら？」
ぎんは手探りで財布の中から出演料の三千円を払うと、「今日は帰るよ」と言う。
「じゃ、バスの時間を見てあげようね」
真向かいの洋品店の前がバス停である。
「いいよ。向かいの洋品店で買い物していくから」
「そう、気をつけて道路を渡ってね」
「うん、有難とね」
女将は、ぎんが用心深く、往来の車の音が絶えたのを確かめて、白い杖をついてゆっくりと道路を横断するのを確かめ、客が待っている店の中へと急ぎ戻った。ぎんは、洋品店で買い物してから、隣のコンビニでタクシーを呼んでもらって帰ると言っていた。

翌、四月六日のカラオケ発表会の会場は、健康福祉センター〝気楽館〟からは徒歩五分ほどの位置にある市の公民館だった。公民館は、三百席ほどの小さなホールだが、ゆったりとしたロビーがあり、コンサートや舞踊発表会、講演会などで、土日、祝祭日には特に賑わう。正面玄関には、〝第十五回若葉会カラオケ発表会〟の大きな立て看板が目立っていた。
洋子は、当日出演するシルバー女性部のメンバーの写真を撮るためにカメラを携えて参加していた。しかし、上田ぎんからは何の連絡もないまま、姿さえ見せなかった。洋子には想像もつかない不可解な事件がすでに始まっていたのだ。

＊

翌週に開催が迫っているシルバー女性部の集いの出欠を確認するため、洋子は朝に晩に上田ぎん宅に電話を入れたが、応答はなかった。誰に聞けばぎんの様子が判るだろうと頭を巡らせた洋子は、介護関係のボランティアグループの会長である北条麗子に電話を入れた。
「上田ぎんさんと連絡がつかないのだけど、入院でもなさっているのではないかし

ら？　ご存知ない？」
「入院なんて聞いてないわよ。でも明朝にでも覗いてみるわ」
翌朝、麗子から連絡が入った。
「早朝、ぎんさんちに行って見たけど、留守で、郵便受けに六日からの新聞がたまっていたの。今日はもう十日でしょう。五日も経っているので心配で、民生委員さんに連絡を取ったところ、市役所の人とカギを開けて入って見てくれるって」
眼の悪いぎんが新聞を取っていたとは、洋子には驚きだった。市から立派な拡大器が支給されたと言っていたから、挑戦していたのかと、と洋子はぎんが愛おしく思えた。
〝家の中で、もし、倒れていたのなら、まだ息はあるだろうか〟と、洋子は気が気でならなかった。ようやく、夜になって北条麗子から連絡が入った。
「家にはいなかったようよ。トイレも風呂場も見てくれたって。帰ってきた様子はないそうよ。一体どこに行ったのかしら。彼女、外泊したことのない人なんだけど…」
民生委員は隣町にいるぎんの兄夫婦に連絡を取ったが、心当たりはないとの返事だった。また、兄夫婦が捜索のためのアナウンスを警察に依頼した様子もなかった。警察がぎんの市営住宅やその周辺に聞き込みをしていることを耳にした洋子は、一日も早くぎんの行方が判りますようにと、祈る思いだった。

そんな折、ヌカ喜びするような事件が起きた。上田ぎんと同じ市営住宅に住む野沢千代が、健康福祉センター〝気楽館〟に行った時のことだ。駅と気楽館をピストン輸送している市の福祉バスの運転手から、千代は声を掛けられた。
「最近、上田ぎんさんに会わないけど、彼女元気かい？」
「ぎんさん行方不明なのよ。警察も来て大変なの」
「僕は市の独居老人の名簿を持っているから、調べてあげるよ。確か、それには連絡先も載っていたから」と運転手は言った。その翌日、
「東京の息子さんのところに電話したら、男の人が『こちらにいます』と言ったよ。ぎんさん本人とは話してないけどね」と告げた。
千代は、涙が出そうなほどに安堵して、心配している近所の人たちにも知らせた。それを聞いた北条麗子は、洋子に連絡してきた。
「ぎんさん、見つかったんですって！　これは確かな情報よ。詳しくは後でね」と。

しかし、それは運転手沼田の嘘であったことが翌日判明した。野沢千代と親しくしている峰晴美が、その話を千代から聞き、疑問を持ったのだ。晴美は、随分昔からぎんとの交流があり、事情にも詳しかった。

「そんな事、嘘だよ！　運転手が独居老人の名簿を持ってるはずがないでしょう、個人情報なのに。それに、東京までぎんさんが一人で行けるわけないでしょうよ。眼の悪いぎんさんがどうやって行くのよ。だいたい、もう何十年も音信不通の息子だよ」

返す言葉もない千代は、晴美に頼んだ。

「じゃ、私と一緒にバスに乗って、運転手に晴美さんから聞いてよ、お願い」

バスの中で晴美に詰め寄られた運転手沼田は、しどろもどろになった。沼田の声は消え入りそうになり、絶句した。

「じゃ、嘘を教えたのね！」

普段は、内気な千代だったが、「ひどい！」と詰め寄った。挙句の果てに、沼田は「そんなことは一切言ってない」と、上田ぎんについて話した内容を全て否定したのだ。

峰晴美は、シルバー女性部の役員でもあることから、その一部始終を会長の洋子に報告してきた。

しかし、洋子はすでに前日「ぎんさんが見つかったって！　確かな情報だって」と、寿司屋若葉に報告をしていた。若葉に問い合わせをしてきた警察官から、洋子に直接電話がかかってきた。「どこから聞いた情報ですか」と、詰問口調だった。洋子は、峰晴美から聞いた顛末を説明した。

洋子には、運転手がなぜ嘘を言う必要があったのか、納得がいかない。冗談だとすれば、あまりにも悪質だ。そんなことが公（おおやけ）になったら、沼田は運転手を解雇されるのではないだろうか、とも考えた。しかし、沼田はそんなことは一切言っていない、と否定している。

洋子は消防署にも問い合わせをしてみた。

「四月五日の午後から今日までに、救急車でどこかの病院に搬送された上田ぎんという女性はいなかったでしょうか」

「病院に搬送したそういう女性はいませんでしたね」との消防署員の応答だった。

それ故、ぎんが、どこかに入院しており、連絡もできない状態であるという可能性も消えた。

〝普段、全く外泊をすることのないぎんさんのことだから、どこに行ったのだろう〟と心配していたシルバー女性部の友人たちも、〝何らかの事件に巻き込まれたに違いない〟と半ば悲しい確信をするようになっていた。

上田ぎんは、眼が不自由なので用心深い女性だ。一人では決まった道しか歩かない。往来では、車の方から気付いてもらえるように、白い杖をついて、目立つ濃いグリーンのウインドブレイカーを着て、市営住宅の住まいから、普通の人なら十分で行ける駅向かいのスーパーに、彼女の足取りでは二十分ほどもかけて、運動になるからと毎日通っていた。

ぎんはスーパー前のベンチに腰掛けて、ウオークマンを聴くのが日課だった。また、ぎんがカラオケを楽しむ気楽館へは、この駅前から出ている無料の市バスを利用していた。

それにしても、彼女は一体どこに行ったのだろう。どこに連れ去られたのだろう。日数が経つにつれ、どこかに監禁されているという可能性も考えられず、〝殺されてどこかに埋められたのだろうか〟としか洋子には考えられなくなっていった。

「ぎんさん、女だからねぇ……」とシルバー女性部の友人の一人が溜息をついた。

洋子は、あらゆる可能性を考えてみた。

〝運転手沼田は、わざわざ、ぎんさんのことを自分の方から話題にしてきた。万が一、沼田が事件と何らかの関係があるとすれば、ぎんさんの捜索が打ち切られるように、「息子の処にいた」と嘘をつき、世間を欺いたとも考えられる。一度は、誰もが安堵し、失そう事件は解決したと思ったからだ。洋子は当時のことを振り返った。

しかし、野沢千代の友人である峰晴美が沼田の嘘を見破ったのだが、その顛末は、すでに警察官猪塚に伝えてある。後は警察の仕事だ、と洋子は考えていた。

ところが後日、洋子は北条麗子から、バスの運転手である沼田が市の職員であることを聞いたのだ。それ故、独居老人の名簿を調べ得る立場にあることが判った。

では、その立場を利用して「調べてあげるよ」と言って、「息子の処にいた」と思わせる嘘をついたのか。市の職員がそんな嘘を面白半分に言うなんて信じられない。

しかし沼田は、警察には「そんなことは一切言ってない」と否定した。洋子の家に電話を掛けてきた警察官猪塚氏の憮然とした応対は、市の職員である沼田の言葉の方を信用し、洋子たちの方を疑ったからなのだろうか？

さらに洋子は、次の可能性をも探った。

ベンチ仲間の男性は、どんな人たちなのだろう。また、かつては噂にのぼるほど親しくしていて、いつもぎんさんが車に乗せてもらっていたという狭山という男性が、ひょっとして何かを知っている可能性があるかも知れない。

狭山は、ぎんの住む市営住宅近くに、古くからあったレコード店のオーナーだ。妻を亡くしてからは、一人で細々と経営していた。近年ではレコードに代わって、レーザーディスクやCD、カセットテープが主流になり、音楽好きのぎんには、テープの注文をしに、よく足を運ぶ憩いの場だったかもしれない。

しかし、近くに住む北条麗子が、狭山の店を訪ねたが、「ここ数カ月間、上田さんとは没交渉ですよ」と。また、警察にもそう伝えたと麗子に話している。

本人達の証言がどうであれ、警察はあらゆる捜査を続けるはずだと洋子は信じたかった。

洋子は市役所とも連絡を取った。シルバー女性部を含む高齢者クラブは、介護福祉課の担当になる。今年、課の担当者が変わったことから、四月十五日、シルバー女性部の集いを前にして、挨拶がてら市役所に出向き、今年度のメンバーの名簿を提出すべく持参した。洋子は、名簿を渡しながら言った。

「この女性、上田ぎんさんが、行方不明になって、私たち心配しているのですが…」

「いや、こちらでも心配しているんですよ。今日は、間もなくしたら、もう一度、上田さん宅に入り、その上で、今後のことを検討することにしています」

あゝ、四月十日に民生委員さんと一緒に上田宅に入ってくれたのは、この担当者だったのか。今日はきっと警察と一緒に入るのだろう。

「有難うございます。宜しくお願いします」

洋子は深々と頭を下げ、思い切って聞いた。

「これまで、行方不明者が出ると、アナウンスがあったようですが、それはやっていただけないのでしょうか」

「その件も含め、検討しましょう。何かあったら連絡します」

洋子は嬉しい返事をもらい、帰宅した。
翌十六日および十七日と、行方不明の八十歳前後の白髪の女性の消息について、市民に情報提供を求める放送が市内に流れた。
しかし、その後もアナウンスの効果もなく、何の進展もない日々が流れ、洋子はいたたまれない思いの毎日を過ごした。

＊

上田ぎんが行方不明になって三週間以上も経った四月二十八日の夕刻、丸山市の南に位置する田代市との境を流れる結城川の土手沿いで、彼女が遺体となって発見されたとの知らせが、北条麗子から洋子にもたらされたのだ。
麗子は、上田ぎんのことを洋子に聞かれるまで気付かなかったことに胸を痛め、彼女が懇意にしている男性議員齊藤に上田ぎんの捜索を相談していた。しかし、齊藤議員は、隣町の兄夫婦も、その息子も、上田ぎんの捜索には積極的でないことから手の打ちようがないと嘆いた。社会福祉協議会の方も、東京に住んでいるらしいという、ぎんの息子の電話番号さえ、個人情報だからと齊藤議員には教えなかった。
しかし、田代市の結城川のほとりでぎんの遺体が見つかると、田代警察署から、丸山警察署や気楽館にある社会福祉協議会に問い合わせが入り、そこから齊藤議員にも連絡が入ったのだ。
齊藤議員は翌日、田代警察署に出向いた。
「ご家族以外にはお話できません」と言われたが、「差し支えない範囲で結構ですから」と粘った。おかげで、洋子は、齊藤議員が得た情報を北条麗子経由で聞くことができた。

田代市の結城川の川岸で釣りをしていた男性が、女性の遺体を見つけ、田代警察署に通報したとのことだ。その場所は、丸山市の南部を蛇行し、田代市北部を流れている結城川のほとりであり、宇津木あたりと聞いた。
齊藤議員の話によると、警察は、「事故と事件の両面で捜査します」とのことだった。しかし、「事件を想定するようなものが体には見当たらないことから、どこかから川に落ちて流されて来た可能性もある」との見解であり、「白い杖が見つかっていないので、捜しています」と。
解剖所見など具体的な内容は、一切伏せられ、齊藤議員には、唯それだけの情報

しか与えられなかった。齊藤議員から上田ぎんの甥に連絡が取られ、上田ぎん本人であることが確認された。

洋子は思いを巡らせた――

「事故と事件の両方で捜査します」と言いながら、「事件を想定するようなものが、体には見当たらない事から、どこかから落ちて…」という表現は、事件ではなく事故という判断をしていると匂わせているようだ。また「川に落ち」と溺死を暗示しているようだ。

なぜ、眼の悪い上田ぎんがそんな所で見つかったのか、彼女を知る人なら誰でも疑問に思う。彼女が一人で行けるはずもないからだ。　警察が言うように、もし、どこかで川に落ち、流されてきたとするならば、結城川のどの地点から落ちたのだろう。宇津木より上流ということになるが、丸山市の南部をゆったり流れている結城川には水門橋があるので、それ以北から流れてくることはありえない。

水門橋から、遺体が発見された宇津木までの結城川は、両岸とも緑の河川敷が広いので、川に直接落ちた、あるいは落とされたとすれば、橋の上からということになる。そうでなければ、河川敷まで降りて川のほとりまで行ったことになる。橋は水門橋を含め、車の往来の多い道路であり、しかも両岸からも見通しが良く、橋から落ちた、あるいは落とされたとは考えにくい。河川敷まで降りた後の事故、あるいは事件と考える方が自然だと洋子は考えた。結城川の川幅は広く、両岸ともに河川敷も広大で、川べり近くまで自動車で降りられる道も数か所ある。しかし、土地勘のない者には、降り口が分かりにくく、眼の不自由なぎんが一人で降りることはあり得ないので、誰か知人と一緒だったとしか考えられない。何らかの理由で、川べりまで降りた後に、川に落ちたか、落とされたということになる。誤って落ちたのなら、連れから通報があっただろうから、通報もなく、三週間も放置された事実を思えば、事件以外には考えられない。彼女が、知らない人の車に乗るとは考えられないので、よく知る人ということになる、と洋子は思いを巡らせた。

あるいは、殺されてから、川に落とされたということだろうか。それならば、警察のいう「事件を想定するようなものが体には見当たらなかった」という言葉と矛盾する。また、薬物で殺されたとするならば、死体解剖の結果判っていたはずだ。警察が「事件を想定するようなものが、体には見当たらない事から…」という表現を使ったことは、殺人を匂わす外傷や痕跡もなく、薬物も検出されなかったという

ことだろう。それ故に、警察ではむしろ事故の線を想定しているようだ。しかし、ぎんは眼が不自由であり、丸山市の外れを流れる結城川には、一人では行くはずも、行けるはずもないのだ。

洋子はさらに思いを巡らす―

四月五日、ぎんが、集金に来たガス屋に若葉まで連れていってもらい、若葉でお金を払った後、道路向かいの洋品店に行った。そこで、知人に会ったか、あるいは、洋品店を出て、隣のコンビニに行く間に、知人と出会った、としか考えられない。タクシー会社には、齊藤議員も問い合わせをしたが、タクシーを依頼する電話は入っていなかったからだ。

通りすがりの知人に、車の中からか、駐車場でか、「ぎんさん、家に帰るのかい。乗せて行ってあげようか」と誘われたのではないだろうか。そして、車の中で、ひょっとして、「まだ早いからカラオケにでも行かないか」と誘われたとしたら、一緒に行った可能性もありそうだ。他人から軽んじられたくないぎんさんだから、〝金はあるよ〟と言っただろう。また饒舌なところのある彼女だから、今日五日、生活保護費や障害者年金が入ったとか、持ち金をいつも全部持ち歩いている等と、話さないとも限らない。あるいは、すでにその事実を知っている人物なのかも知れない。

カラオケに興じた後に、「アルコールがちょっと入ったから、結城川のほとりで酔いをさましてから帰ろう」ということなら、ぎんさんがその知人の車に同乗して河川敷まで降りた可能性も考えられなくもない。結城川の田代市側は、特に河川敷が広く、公園になっている場所が数か所ある。また河川敷に沿ったバス道路は、鄙びた宿場町ふうの街並みで、カラオケのできる店や居酒屋もある。

洋子は様々に思いを巡らせてみるが、その知人は誰なのかとなると、特定するすべ術もなかった。

少なくとも、ぎんが自殺でないことは、シルバー女性部の友人たちの一致する見解だ。また、自殺する人が、その前にわざわざカラオケの出場料を払いに行くはずもないだろうとも考える。ぎんの家には、六日からの新聞がたまっていた事から、事件に遭ったのは、五日、洋品店を出てからと、洋子は辛(つら)い確信をしている。

洋子は家の仏壇に手を合わせ、ぎんの冥福を祈るのだが、溺れて死んだなんてどんなに苦しかっただろう。水の中で押さえつけられたか、落とされたか。胃や肺に

入った水の量から、警察では判っているだろうに。それに、長い間川の中で、さぞ冷たかっただろうと胸が痛んでならない。また、彼女の無念さが胸に迫ってくるのだ。遺体がどの様な状態だったのか、聞く由もないが、今年は例年にない厳しい寒さが続いていたことが、少しは幸いして腐乱を遅らせていたことだろう。それが洋子のせめてもの慰めだ。

洋子ばかりでなく、悲しみと疑惑が胸に渦巻く、シルバー女性部の友人たちであった。

「ぎんさんの行きつけの銀行は駅近くだから、彼女の通帳を調べてもらえば、何らかの手掛かりが掴めるかも知れない。私、駅前の派出署に出向いてみるわ」

峰晴美が洋子にそう告げた矢先のこと―。

それは、遺体発見から数日たった五月三日だった。上田ぎんの甥と名乗る男性が、ぎんの住んでいた市営住宅を訪れ、向かいに住む野沢千代宅にも挨拶に廻って来た。

「叔母が大変お世話になりました」と丁寧に挨拶をした後、「遺体を引き取り、荼毘(だび)にふして、すでに当家の墓に埋葬しました」と報告した。それを聞いて、千代は安堵した。しかし、その次の言葉は意外なものだった。

「四月五日、叔母は寿司屋若葉にカラオケの代金を支払いに行った後、連れて行ってもらったガス屋の奥さんに、仲町の洋品店ではなく、隣の谷部市の洋品店まで連れて行ってもらいました」

〝えっ！　なぜ、今さら、そんな話をわざわざ……、しかも事実と異なることを！〟

隣町の兄夫婦の息子と名乗るその男性は、落ち着いて答えた。峰晴美から詳しい話を聞いていた千代は、嘘を堂々と述べる男の態度に驚きを押し隠して、やっとの思いで尋ねた。

「住まいや荷物はどうされますか」

「役場と相談の上、処分して引き払います。何かと、お世話になりました」

甥と名乗る男性は、慇懃(いんぎん)に挨拶をした。千代は、この立派な風貌の男性が上田ぎんの甥だなんて不思議なくらいだと思った。また、

もう、すべてが終わったのね、警察が遺体を引き渡したということは…。それにもうお墓に埋葬されたのだから…。千代は自分を納得させた。そして、一部始終を峰晴美に知らせたのだった。さらに、

「晴美さん、今さら警察に行っても遅いわよ。もう終わったみたいだから」と付け加えた。

峰晴美から電話を受けた洋子は、「ぎんさんの甥は、一体なぜ、そんな事実と異なることを！」と疑問と怒りが噴き出した。

しかし、隣町のお兄さん一家は、事件が暴かれたら、世間の好奇の目にさらされ、噂の種になるだろう。それを恐れて、事故として穏便に済まして欲しいと頼んだのだろうか。ガス屋の奥さんのこと、洋品店のこと等、警察しか、あるいは、可能性としてだが、犯人しか知らない情報を知っており、故意に事実と異なる報告をして、もう終わったのだ、詮索は無用に願いたいと言わんばかりだ。警察も、事故で済ませてしまえば、捜査する労が要らず、手間が省けて好都合だ、ということだったのだろうか、洋子には納得のいかない経緯だ。

〝そんな！　大切な一人の人間の尊い命じゃないか。うやむやにしてよい訳がない。それじゃ、ぎんさんが浮かばれない。あまりにも可哀想だわ〟

洋子は胸が治まらず、寿司屋若葉の女将に事の次第を伝えた。女将も洋子と同じ思いで憤りを抑えかねていた。しかし、ややあって女将はこう溜息をついた。

「でも、親戚がもう幕引きをしたいと言っているのでは、仕方ないわねぇ。警察も、これ以上捜査をしないんじゃないかしら？　残念ながら、甥ごさんにとっても、お兄さん夫婦にとっても、ぎんさんがそれだけの人だったということなんだろうね。身内なら、普通は、調べてください、犯人を挙げてください、と頼むけどねぇ……。それより、息子はどうしてるの？　ぎんさんの息子が挨拶に来るのが本当じゃないの？」

洋子には答えようもなかった。

「それにしても、こちらにとっては、いつもカラオケ発表会に出てくれた大切なお客さんだったし、残念だわねぇ」

その後も、警察が捜査をしているのか、打ち切られているのか、洋子には、皆目、見当もつかなかった。

洋子は思い余って、五月十一日から二日間をかけて、丸山警察署に長い手紙を書いた。上田ぎんの甥と名乗る男性から事実と異なる報告を受けた野沢千代の驚きと

疑問から筆を起し、眼の不自由な上田ぎんが、市の外れを流れる結城川などに行くはずも、行けるはずもないことから、友人たちは、事故のはずはない、という意見で一致していることを訴えた。峰晴美や、若葉の女将からの情報も引用していたので、二人に下書きを読んでもらい、了承を得た。

洋子は、丸山警察署宛の手紙には、〝尊い一人の人間の命なのに、抹殺してよいのか、犯人が放置されていてよいのか〟との思いも認めたが、できる限り、警察を責めるような書き方は控えた。また、捜査が打ち切られたとは考えたくなかった。ひょっとして、犯人らしき人物に目星がついており、犯人を油断させるために、〝捜査は打ち切られた〟と世間を欺いているのかも知れないとも考えた。

「警察の方では、密かに捜査を続けてくださっているのかも知れないとも考えます。平素より、私どもには分からない御苦労をされておられるでしょうし、なさって来られたことと推察します」と書いたし、「明らかにしなければならない部分、今の時点では明らかにすべきではない部分をわきまえていらっしゃるのは、警察の方々の方だと思いますので、この手紙を読んでいただき、故人の友人たちからの情報と、私たちの思いをお届けさせていただくだけに止め、後の事は全てお任せしたいと存じます」と結んだ。

峰晴美も、若葉の女将も、「苦労して書いても、無視されるだけかも知れないよ」と案じもしたが、「ぎんさんには通じてるよ。きっと、喜んでいるよ」と洋子の労をねぎらうことを忘れなかった。また、三人とも、一方では、警察から出頭要請か、問合せがあるだろうと覚悟をもしていた。しかし、その後、警察からは何の音沙汰もなかった。

事件は葬られてしまったのかと、洋子はやる方ない日々を送っていたが、五月の末に思いも掛けないところから、別の事情が明らかになった。それは、洋子と同じく特別養護老人ホームでボランティア活動をしている橋田民枝が、突然洋子に告げたのだ。

「上田ぎんさんのお兄さんのところへ、やっとお悔やみに行かせていただいたのよ」

「えっ！　お兄さんの家をご存知だったのですか？」

「えゝ、お兄さんは病気で、会えなかったけど、奥さんとお話できたわよ。穏やかな方でね。でも、『お骨は当家の墓には入れられません』って、きっぱり言われたわ」

それでは、甥ごさんが言ったことは嘘？　〝当家の墓に埋葬しました〟と言ったのは。
「では、遺骨はどうなってるの」
「お寺に預けっぱなしのようよ。奥さんによると、『『義妹（いもうと）の息子と娘に連絡がついて、遺骨を引き取るかどうかを検討しています』って。遺骨の始末に困った警察が、息子さん達に連絡を取ったのではないかしら」
「そうですか、でも引き取るかどうかを検討しているって…、取りに来ないこともありうるということですか？　そしたら、お骨はどうなるのですか？」
「引き取る人がなければ、無縁仏になってしまうわねぇ……」
なに、それ！　そんなひどい事！　洋子には合点がいかなかった。

またまた意外な展開にショックを受けた洋子は、峰晴美に連絡を取った。晴美は、「ぎんさんは、お兄さん夫婦とは付き合いが少しはあったから、お墓に埋葬してもらえたんだと、安心していたんだけど…、違っていたのね。ぎんさんの息子も娘も、『母親が死んだから、遺骨を引き取れ』と急に言われても、今さら迷惑でしょうよ」
「えっ、どうして？　母親の遺骨なのに」

＊

峰晴美は、洋子の知らなかった上田ぎんの過去を語った。
ぎんは、子ども達がまだ小さかった頃、知り合った船乗りと駆け落ちをして、その男を追いかけ、東北から九州まで、港の居酒屋をあちこち転々としながら働いたという。
「やがて、こちらに落ち着いてから、そうねぇ、三十年ほど前だったかしら、息子さんと娘さんの連絡先が判ってね、息子さんも娘さんも、それぞれ別の日だったけど、訪ねてきたことがあったのよ。『子どもが訪ねてくるけど布団がない』と言うので、家の布団を運んで貸したわよ。
子ども達にとっては、何十年ぶりかで会う、瞼の母だったでしょうね。でも、会ってがっかりしたんでしょう、それ以来、音信不通なの。娘さんの方は、女の子を連れて来てね、その子は、三歳くらいだったと思うけど、『こんな汚いところには、もう絶対来ない！』って叫んでね、それっきり…」

悲しい情報だった。三十年ほど前に、連絡がついたのは、おそらく、眼が悪くなって、働けない状態になり、生活保護を受けるようになった時ではないだろうか。保護を受けるに当たって、行政側が親族全員を探し出して照会するので、その時ではないかと思われる。全盲ではないけれど、不自由な生活では、家も綺麗なはずがない、と洋子は悲しくなった。

小さな時に別れた、たぶん捨てられたと思って恨み心を抱いて成長したであろう子ども達にとって、何十年ぶりかで会った母は、姿も、考え方も、生活も、子ども達の恨み心を解消するには、ほど遠い存在だったのだろう。

そう言えば、上田ぎんのお兄さん宅を訪ねた橋田民枝は、現在の家に移る以前には、ぎんさんが市営住宅に移る前の住まいとお互いに近くだったと言っていた。ぎんが行方不明になって、洋子が心配していることを知り、その当時のぎんの事を洋子に語った事がある。

「どちらかと言えば、ぎんさんは周囲に迷惑をかける存在だったわね。でも、その頃同居していた男性は、良識ある真面目な方でね、ぎんさんには不釣り合いなくらいだったわね。

苗字は、上田のままで離婚はしていないようだけど、家を出て男性との遍歴があったようで、家族はぎんさんに対して勝手気ままに生きてきた人という、良くない印象を持っていると思うよ」と語った話と重なった。

洋子は無性に悲しくなった。家に帰り、夕飯の支度にかかっても、上田ぎんの人生が思い描かれ、切なかった。

思い返せば、ぎんは、洋子に夫の事をよく話題にした。

「一ツ橋大学を出てね、頭の良い人だったんだけど酒乱でね。私は家を出ちゃったんだよ」

子ども二人を残して家を出たなどとは、洋子は想像もしていなかった。息子や娘の自慢をしていたから、てっきり彼女が女手で育て上げたのだと勘違いしていた。

「子どもたちは、父親似でね、二人とも頭がいいんだよ。娘は、東京の三菱銀行に勤務してるし、息子も父親と同じく一ツ橋大学を出てるんだ。本当だよ」

また、ある時は、

「息子に会った時、『お父さん、どうしてる』って聞いたら、『一緒に住んでるよ。どんな人でも、父親だからね』って」

「そう、立派な息子さんね」
洋子はその会話が忘れられない。今にして思えば、例の、三十年ほど前に親子の再会を果たした時のことなのかもしれない。そんな息子さんなのだから、「どんな人でも、母親だからね」と言って、遺骨を引き取るのではないだろうか。洋子はひたすらそれを願っている。しかし、ぎんの息子がどういう判断を下したのか、洋子には知る由もない。洋子には、まるで、全てが濃い霧の中だ。何ひとつ明らかにならない。

六月のシルバー女性部の集いを控えて、六月六日に洋子は再び、介護福祉課を訪れた。
「上田ぎんさんのことを、女性部の皆さまにどの様に報告すればよろしいでしょうか」
それを相談すれば、何かが判るかも知れないとの淡い期待が洋子にはあった。しかし、事実は真逆だった。
「上田さんのことは、警察の方でもお話できないことがありまして…少々お待ちください」
洋子は数分間待たされた。警察か、上司と連絡を取ったのだろう、担当者が戻って来て、
しっかりとした口調で、ごく簡単に述べた。
「大変残念ですが、お亡くなりになったことが判りました。そして、御親族の許で荼毘にふされました」
えっ！　それだけ！　洋子は我が耳を疑った。そして、思い切って主張した、
「でも、上田さんを知る者は皆、事故ではなく、事件だと思っています。眼の不自由な上田さんが、一人で、市の外れの結城川などに行けるはずがないのです」
「眼が悪かったそうですね。でも、警察では、もう捜査を打ち切ったようですよ」
洋子はガーンと一発くらった。何かを言おうとしたが、ここは警察ではない、何を言っても無駄だと、やっとの思いで挨拶をした。
「有難うございました」
〝やっぱり、捜査は打ち切られたのか…。いや、それは表向きではないのか？〟
洋子には、皆目、見当もつかなかった。

警察が話せないことがあるというのは、何故なのか。他のニュースと同じ程度の報道はなされるべきではないのか。四月十六、十七日と、行方不明者の放送をして、市民に協力を求めたのだから、何らかの形でお知らせがあってしかるべきではないか。

しかし、何の報道もなく、もちろん洋子への市役所からの連絡もなかった。また再三再四、若葉に電話をかけてきた警察官猪塚からも、若葉への一言の報告もなかった。〝市民には知る権利はないのだろうか〟、洋子は苛立ちと憤りを覚えていた。

＊

洋子はお盆の頃に結城川を訪れたいと願っていたのだが、九月半ばにやっと宇津木行きが実現した。せめてもの思いで地図を片手に、ぎんを偲ぼうと、宇津木運動公園経由の田代駅行きのバスに乗った。九月も半ばに入ったのに、異常な残暑が続いていた。洋子はぎんにお花を手向けようと、花屋に寄って購入したリンドウの花束を携えていた。

洋子の住む南仲町から二十分ほどで、田代市の宇津木運動公園だった。手持ちの地図で、宇津木署が近くにあることを確かめていた。バス停から二、三分歩いたところに、宇津木署はあった。洋子は派出署だと勘違いしていたが、そこは消防署だった。一瞬ためらったが、勇気を出して中に入った。

「四月の末に、私の友人がこの近くの川で亡くなったと聞いて訪ねて来たのですが、場所は分かるでしょうか」

「あゝ、もう一つの班の方なので、電話で問い合わせてみましょう」

しばらく経って、署員が戻ってきて、少々厳しい表情で言った。

「親族の方以外には教えることはできません、というわけではないのですが、どういうご関係ですか。ここにお名前と住所と関係性を書いてください」

洋子が渡された白い紙に住所・氏名などを書いている間に署員は奥に行き、間もなく地図帳とコピーした紙を持ってきた。

「ここで亡くなっているのが発見されました」

コピーの地図には、印が付けられていた。

「二交代になっていまして、もう一つの班の方なのですが、ボートを出し、この地点から遺体を引き揚げました」

洋子が抱えているりんどうの花束を見降ろし、地図を示しながら署員は続けた。

「遺体が見つかった辺りは、葦が高く茂っていて、川のほとりに行くのは危ないので、お花を手向けるのは、遺体が引き揚げられたこの辺りでいいんじゃないですか。そこは護岸工事がなされていて、コンクリート張りになっていますからすぐに判りますよ」

思いがけず親切に教えてもらい、洋子は少し気持ちが軽くなった。川べりまで降りて行くと、広い河川敷で公園のようになっており、ベンチもあり、車も数台止まっていた。ボートを着けたという、コンクリートを張った川岸はすぐ分かったが、洋子はあえて人目を避けて、右に折れ、背の高い葦が茂っている川沿いの小道を辿った。

しばらく行くと、葦が刈られ川の流れが望める所があった。彼女が見つかった場所に近いのでは、と思われた。足元に気をつけながら、芦を刈って作った細い通路を辿って川べりまで行き、そこにしゃがんでリンドウの花束を供えた。ぎんが安らかに眠れていますようにと祈った。しかし、ややしばらくして、

「どうして、ぎんさんの命を奪ったのよ！　長いこと、三週間も、どうしてぎんさんを隠していたのよ！」

川には罪はないのだが、洋子の恨み心が噴き出した。しかし、結城川は洋子の眼前を穏やかに流れ続けていた。そこは、足場がぬかるんでいて、靴がのめりこみそうだったので、洋子は細い通路を引き返し、川沿いの小道を戻り、公園のようになっている空地の、川の流れの側のベンチに腰を下ろした。

結城川の流れを見つめていた洋子の胸に、〈人は、生きたようにしか死ねない〉という言葉が浮かんできた。

〝そうであるならば、ぎんさんが、皆に好かれるような、穏やかな人に変わっていくまで、どうして生かしてくれなかったのか？　これまでの人生で彼女が着けた垢を流し去るまで、生かしておいて欲しかった。本当のぎんさんは、心優しい人だから。それに、ぎんさんは、その名のように長生きできる人だっただろうに〟

この〝恨み心〟をどこへぶつけたらいいのだろう？　洋子は、運命だなどと片付けられない。誰がぎんさんの命を断ったのか。何のために？　洋子は川の流れに思いをぶつけた。

今年は干ばつが続いているというのに、結城川は豊かな水を湛え、静かに流れていた。宇津木あたりは、随分と川幅が広い。両岸には、洋子の背丈ほどの葦が生え、広い河川敷にはかなり大きな木々が茂り、心安らぐ風景でもあった。対岸の河川敷

に生えている木々の上空に、ちょうど真っ赤な大きな夕陽が傾きかけていた。あたりの空を、鮮やかな茜色に染めあげて―。

郷愁を起させるような結城川の佇(たたず)まいが、ふっと洋子にかつてのぎんの言葉を思い出させた。洋子が会長になった当初、ぎんがよく口にした言葉だ。

「今度の会長は差別をしない人だよ」

ぎんは、〝生活保護を受けるくらいなら、死んだ方がましだ〟と自殺を図ろうとした過去を、洋子に語ったことがある。プライドの高いぎんは、人の無意識の差別までも嗅ぎ取って、時には相手に怒りをぶつけ、時には悔しさを自らの胸に刻んだのだろうか。その言葉を噛みしめた時、洋子は気がついた。

〝ぎんさんは、私に期待してくれていたんだ。会長になってもう何年になるだろう。それなのに、私はうかうかと過ごしてしまった。私は自分の怒りや憤りを、事故として処理してしまったかも知れない警察や、ぎんさんを殺(あや)めたであろう犯人ばかりに向けてきた。むしろ、私自身に眼を向けるべきだったのに。もっとぎんさんに関わってあげたら良かったのに…。私の本当の後悔は、そこにあった！〟と洋子が気付いた瞬間、何と、ぎんがにっこり洋子の思いの中で笑った。

〝ありがとね〟

〝とんでもない！　私こそ！〟

洋子には、これまで自分を苦しめてきた濃い霧が晴れていくように思えた。

何もかにもが、不明で、不可解で、不条理でもあって、やり場のない憤りや悔しさを抱き、悶々とした半年間を過ごしてきた洋子であった。

〝人は面白半分に嘘をつく、運転手沼田のように…。それなのに、あろうことか、嘘をついているのは、沼田ではなく、むしろ私たち三人の方だと警察に思われている節だってある。だから、一生懸命書いた手紙だって、警察は無視したのだろうか？

人は、自分を守るためには、事実と異なる話をでっちあげる、沼田だけでなく、上田ぎんの甥だってそうだ。

一人の人が亡くなったのに、しかも命を断たれた可能性が大きいのに、市からも警察からも、公(おおやけ)にされることも一切なく、葬むられる。そんなことがあって良いのか？〟

そんな憤りを抱いて、結城川のほとり、宇津木を訪れた洋子だった。

〝そしたら何と、かつてのぎんさんの言葉が、私の心の奥底の思いに気付かせてくれた〟

お陰で、恨み心と憤りに振り回されることはもうないだろう、と洋子は感じた。いや、むしろ、この苦しみをエネルギーに替えることができるように思えた。

〝これで、私は頑張れる。私は諦めない。しぶとく、何らかの方法を探っていくわ。マスコミに訴える方法だってあるかも知れない。何としても、上田ぎんという一人の女性を闇に葬らせたりはしない。彼女の人生を描くことも一つの方法かも知れない。〈ペンは武より強し〉だもの。それがきっかけで、ひょっとして再捜査だって夢ではないかも知れない〟 洋子は、対岸の木々の間に沈みゆく夕陽に誓った。

〝会長、この度は、世間のいろんな面を見させたね。随分翻弄させてしまったね。でも、私が勉強させてあげたんだね〟

洋子には、〝社会勉強をさせてあげた〟と、得意そうに語るぎんの声が聞こえるように思えた。洋子は、こっくりと頷(うなづ)いた。

〝思いっきり書きなよ、私が題材をあげたんだから〟

ぎんの言葉に背中を押されるように、洋子は暮れかけてきた河川敷のゆるやかな坂道を足早に登り、バス通りに出た。振り返えると、結城川は今や残照の中でシルエットになった木々の間を、ほのかな茜色の空を映して流れていた。バスを待つ洋子の心は、一刻も早くペンを執りたいとの思いに赤々と燃えていた。

＊

やがてバスが来て、洋子は車中の人となった。空いた座席はなく、つり革とともに揺られていると、先ほど、結城川を振り返った時にふと湧いた疑問が膨(ふく)らんで、洋子は狼狽した。洋子には、残照の中、川のほとりでぎんが洋子を見送ってくれているような気がしたのだ。洋子はぎんの穏やかな雰囲気を感じて「今さら犯人を挙げて欲しいとぎんさんは願っているだろうか」との疑問が押し寄せた。

四月の末に結城川でぎんの遺体が上がって以来、彼女の無念さが洋子の胸を締め付けていた。しかし、洋子が結城川を訪れ、ぎんの姿を思い浮かべた時、洋子がそれまで感じていたぎんの無念さはどこかに消えていたのだ。穏やかなぎんだった。満ち足りたかのように微笑むぎんがそこにいた。

家に帰り着いた後も、いやその後数週間も、洋子はひとり苦しい迷いの中にいた。

〝ぎんさんは、自分を殺めた犯人を、許せたのだろうか？　彼女が人生で着けてき

た汚れを、結城川の流れで何もかも洗い流した結果、すべてを受け入れることができたのだろうか。〈思いっきり書きなよ〉と言ったのは、単に私を励ますためだったの？〟

確かに洋子には、結城川の美しさに心洗われて、ぎんの魂はすべてを洗い流してそこに眠っていると思えた。いや、〝ぎんさんは確かに、ここに生きている〟と感じられたのだ。

〝ぎんさんは、犯人が自ら犯した罪に懊悩する姿を、透徹した眼で見通したのだろうか。

〈赦してくれ！〉と叫んでいる声さえ聞こえていたのだろうか？　犯人はすでに罰を受けているのだから、と許せたのだろうか？〟

〝それにあの日、心を許して、共に河川敷まで降りて、ひと時を共に過ごした相手なのだから、結局は、恨みを流せたのだろうか。だから、ぎんさんはあんなに穏やかだったのだろうか〟

苦しいほどに渦巻く疑問とともに、洋子の胸には、黒田官兵衛こと黒田如水の水五訓の一節が浮かんでいた。

――自ら潔（いさぎよ）うして他の汚れを洗い、清濁併（あわ）せ容（い）るるは水なり――

〝ぎんさんは、結城川の水になったのだろうか？〟　それなら、なおのこと、洋子は、せめてぎんの生き様を書き残しておきたかった。ゆえに洋子は、心に浮かぶぎんに敢えて問うた、

「ぎんさん、教えて！　あなたを殺めたのは、一体誰？」

しかし、洋子の問いには答えず、ぎんの姿はふっと消えた。代わりに、音もなく流れる結城川の広大な流れが洋子の脳裏に広がっていた。

（完）